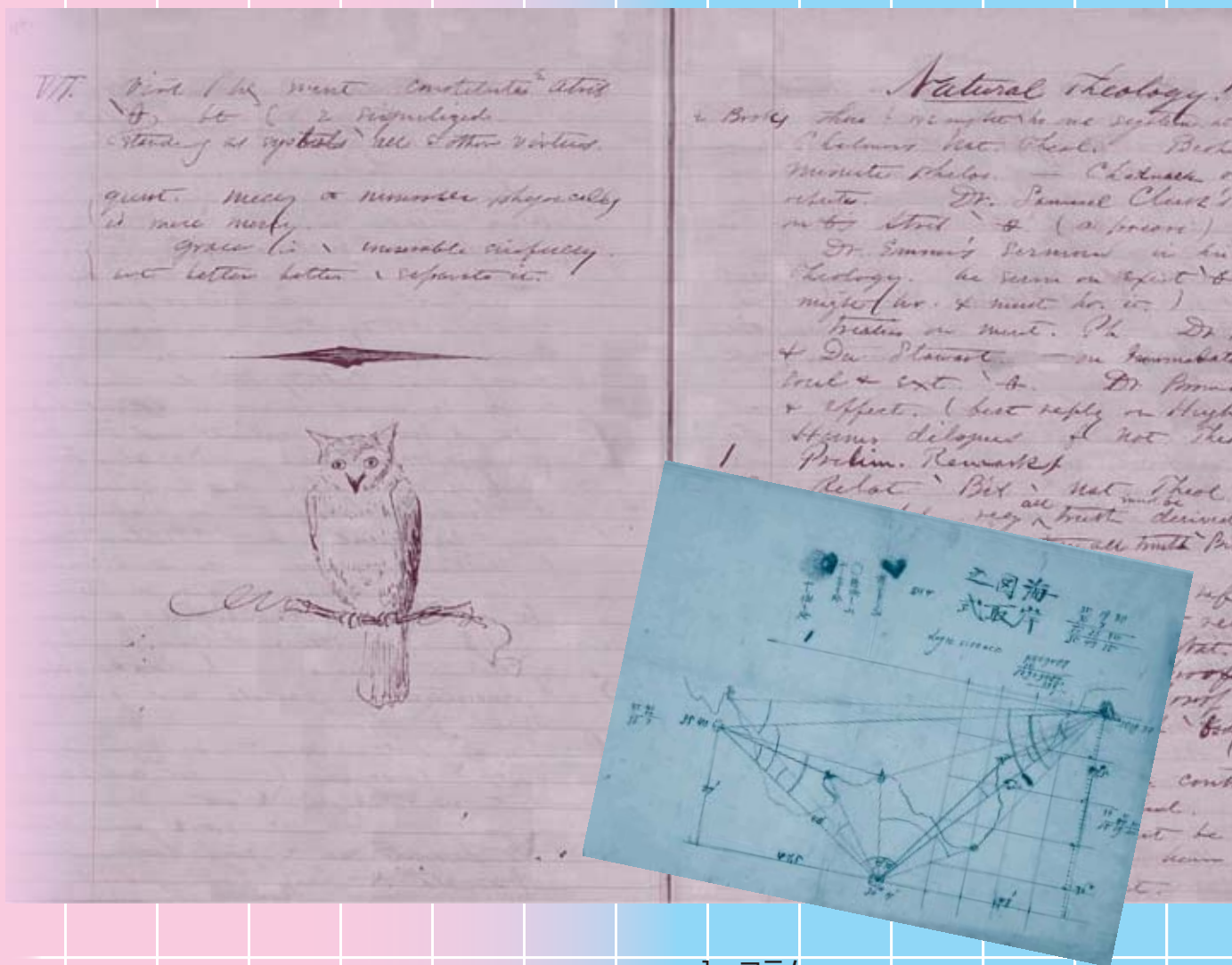


同志社大学

同志社社史資料センター報



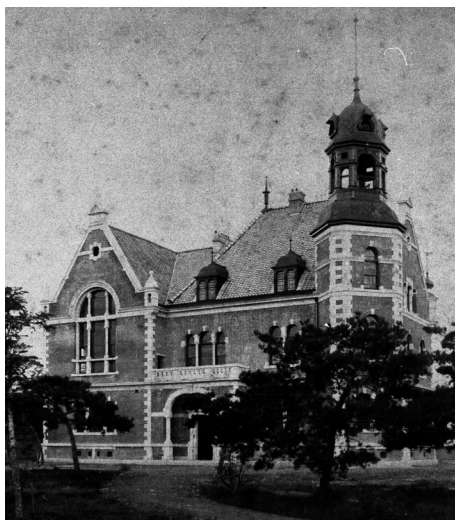
第**3**号
2006年度

1. コラム
「クラーク記念館の保存修理」
・現場から(吉田 理)
・一本の釘(鶴岡典慶)
2. 資料業務
3. 展示
4. 『同志社歳時記』所収画像の整理
5. 公開講演会
6. 研究活動
7. 第164回新島襄生誕記念会
8. 新島旧邸
9. 委員会

現場から

クラーク記念館は、1894年1月の開館以来、学生の教室等として使われ続け今日に至っているが、1963年に大規模な改修を受けるなど明治時代の雰囲気が失われていた。今回の重要文化財としての保存修理では、建設当初の姿への復原と傷んだ材料の修理、耐震補強の3本柱で工事を進めている。保存修理も終盤にさしかかり、2007年12月の竣工を目指して急ピッチで仕上げの工程を進めている。2006年11月のホームカミングデーで御覧いただいた方でも、現在の状況を想像できる方はほとんどいらっしゃらないと思う。

外観は、ドーマー窓(屋根窓)や大棟両端等の尖塔飾り、煙突の雨除け等が復原され、塔屋や風見塔の屋根が緑青色の銅板葺から黒色の鉄板葺に復された。内部では、漆喰塗りの天井と廻縁蛇腹、漆喰壁と杉板張りの床が復旧され、2階の講堂兼礼拝堂の木製天井が姿を現している。これら復原に際しては、建物に残る痕跡(材料が取り付けいていた痕)に加えて社史資料センターに所蔵されている古写真等を参考にさせていただいた。同じガラス乾板から引き伸ばされた写真でも、焼き付け時の微妙なずれで見たいところがプリントされていないものもあり、幾度かセンターをお訪ねして貴重な資料を見せていただいた。その都度親切に対応してくださった方々に、この場をお借りして謝意を表したい。



竣工時のクラーク記念館(社史資料センター蔵)
この写真が復原の際にとっても参考となった。



保存修理直前のクラーク記念館
屋根のドーマー窓や尖塔飾りが失われていた。

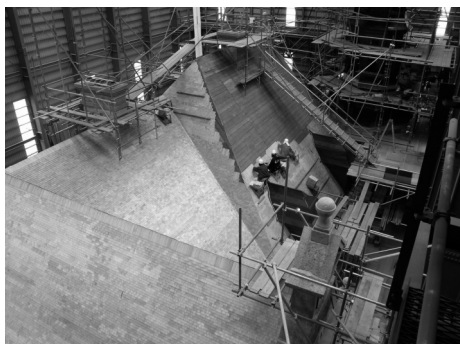
今回の修理で取り外した材料を調べていくと、これらに様々な記録が記されていることが判ってきた。例えば金物類では、小屋組を締め付けているボルトはドイツ製、補強用に使われているレールはイギリス製、扉や窓の金具はアメリカ製であることが判った。また、木材には取り付け位置を示した番付等の墨書等が記されている。これら創建時の工事関係者の記したものに加え、修理時に記されたものも見つかった。その中には1934年の室戸

台風で被災して修理したと思われる記録が塔屋最上部の避雷針の芯木からみつき、修理の履歴の一端を知ることができた。(これには大工や左官等の職人に加え、同志社営繕課担当者の氏名が記されていた。これを聞きつけたこの左官のお孫さんが現場を訪ねてこれ、感慨深げに見入っておられた。彼は現在同志社の営繕工事も請け負う工務店を営んでいる。)また、「三州棚尾奎兵衛」と記された刻印が、棟瓦の1枚から見つかった。奎兵衛は名を永坂奎兵衛(茂三郎、1873～1969)といい、現在の愛知県碧南市に生まれ、学



校を卒業してから家業の瓦製造業を継ぎ、質の良い瓦を生産し「三州がわら」の名声を博した。その学校とは同志社であり、1887年に入学しクラーク記念館の建設が始まった1892年に同志社を卒業して家業を継いでいる。この瓦はいつのものか判然としないが、彼の母校への想いのこもった瓦には間違いない。

さて、クラーク記念館は、保存修理終了後も再び教室や事務室等として使用される予定である。使い続けられることは保存上も望ましいことであり、特に近代建築では保存修理を機に用途変更される物件も多い中、ほぼ建設当初の用途のままで使われていく当館は幸せな建物であると感じる。しかし、今の時代で教育の場として活用するためには現代的設備が不可欠で、学内の修理専門委員会でも話題となったが、文化財的価値を損ねることのないよういかに設置するかが模索された。今回のような建物の大規模な修理は短くても100年周期といわれているが、設備類ははるかに短いサイクルでの更新が予想される。そのため、建物本体を傷めることなく交換可能な取付方法と、高耐久性の材料の採用等



工夫して諸設備を設置している。良好な環境を保つには設備のメンテナンスが重要であるが、その任に当たる各担当者の労力は、想像に難くない。

素屋根は今年の9月末までに取り外す予定である。秋学期当初には以前のイメージを一新し明治時代の雰囲気をつけたクラーク記念館が、ほぼ4年ぶりにキャンパスに姿を現す。

吉田 理

京都府教育庁指導部文化財保護課
重要文化財同志社クラーク記念館保存修理事務所 技師

一本の釘

同志社クラーク記念館保存修理事業は、2003年1月に着手し、4年余りが経過した。工事進捗率で言えば80%を過ぎたところで、現在は屋根や外壁補修等の外部工事を中心に作業が進められている。クラーク記念館が建設されて約110年。いわば、この建物には110年間の歴史が伝えられてきている。今回の50年という長い歳月を費やして実施している修理事業では、建物を直すことはもちろんであるが、その歴史を解明し、後世に伝えていくということも大きな使命のひとつである。この解明作業を行っていく中で、1本の釘あるいはひとつの釘穴が重要な役割を果たすことがある。クラーク記念館の修理においても、この釘穴等の小さな痕跡により判明できたことがいろいろあった。

まず、クラーク記念館の象徴的存在である塔屋部分の屋根には、緑青色をした銅板が張られていたことはよく知られている。しかしこれは、1963年の修理時に張り替えられたもので、それ以前は異なっていた。銅板を取り除くと、銅板を取り付けるためではないいくつかの釘と数多くの釘穴が残されており、それらの痕跡から、①当初は鉄板で葺かれていた、②葺き方は現在と同じ菱葺きであった、③葺き替えられたのは1回だけ、ということが判明したのである。

次に、現在は失われてしまっている大屋根のドーマー窓(屋根面に取り付く窓)についてであるが、実は今回の保存修理が着手された時、大学に保管されていた古写真や当初設計図等から、大方の規模や位置についての予測はついていた。しかし実際にはどの位置にどれくらいの大きさで取り付けいていたのか詳細なところまではわかっていなかった。これを決定付けることが出来たのも屋根の下地面に残されていた釘穴なのである。

もうひとつ、これは内部の2階部分の天井であるが、当初の天井に関係する材料は1室を除いてすべて取り外されてしまっていた。はじめは、この材料の痕跡をもとに他の室も同様に天井の形式が決定できると思っていたが、いざ作業を進めていくと、どうしても辻褄の合わない箇所がでてきたのである。そこで、あらためて各室の煉瓦壁面をじっくり調査し、天井の下地材を止めた釘や釘穴を探していった。すると、煉瓦面に折り曲げて打ち止められた釘が数多く見付き、それらを整理していくと、煉瓦の積み上げ斑(手作業で煉瓦を積んでいったので、同じ段でも場所によって高さが違ってしまふ)を調整しながら、各室とも天井の高さを変えて施工していたことがわかった。

我々修理技術者にとって、建物に残された1本の釘や釘穴の跡は、その建物の経歴を知る手がかりとして非常に重要な意味がある。クラーク記念館には上記以外にも多くの釘や釘穴が残されており、残念ながら解明できなかったものも少なからず存在する。しかし、それらは将来に解明してもらうことを期待して、そのままの状態で大切に残している。

一見何の意味もなさそうな1本の釘や釘穴でも、そこに打たれていることには何らかの理由がある。それが歴史を刻み、その釘や釘穴に真摯に耳を傾ければ歴史を語ってくれる。この4年間、クラーク記念館をどのように修理すればいいのか、建物に日々問いかけながら過ごしてきたので、どうしても愛着が強くなっているが、今回の修理が終わった後、再び同志社大学の校舎として利用されていく中で、この修理を通じて得られた歴史を踏まえ、クラーク記念館が明治から平成に至る歴史の生き証人として、さらには時空を超えて人々が対話できる場として大切に守り伝えられていくことを祈念する次第である。

最後に、今回の工事に携わってもらった大工さん達と撮影した写真を掲載させて頂き、これも同志社社史資料のひとつに加えていただければ幸いである。



屋根の小屋組修理を終え、上棟記念として工事に直接関わった技術者や大工さん達と撮影したもの（2005年10月5日撮影 向かって左端が筆者、右へ順に構造補強設計担当者の富永氏、大工棟梁の辻氏、現場施工責任者の森氏、技師の吉田氏）



4年余りクラーク記念館を覆ってきた素屋根。まもなく取り外され以前の景観に戻る。（2004年2月10日 撮影）

鶴岡 典慶

京都府教育庁指導部文化財保護課
重要文化財同志社クラーク記念館保存修理事務所 文化財専門技術員

資料業務

1. 資料整理

社史資料センター網別蔵書冊数

(2007年3月31日現在)

	00	10	20	30	40	50	60	70	80	90	合計	比率
0 総記	0	47	178	36	76	3	28	21	106	1,470	1,965	19.8%
1 哲学	14	8	165	31	24	139	43	19	77	1,317	1,837	18.5%
2 歴史	34	1,003	98	39	0	31	0	0	810	172	2,187	22.0%
3 社会	108	151	145	131	9	12	136	1,649	11	22	2,374	23.9%
4 自然	28	22	14	9	10	19	32	22	20	51	227	2.3%
5 技術	8	9	47	7	7	4	5	4	10	13	114	1.1%
6 産業	12	23	1	0	0	2	3	23	9	3	76	0.8%
7 芸術	22	2	74	9	13	18	30	5	21	7	201	2.0%
8 言語	7	68	15	66	9	4	0	2	1	10	182	1.8%
9 文学	30	511	113	82	23	2	0	0	2	1	764	7.7%

※日本十進分類法による分類

総冊数 9,927冊

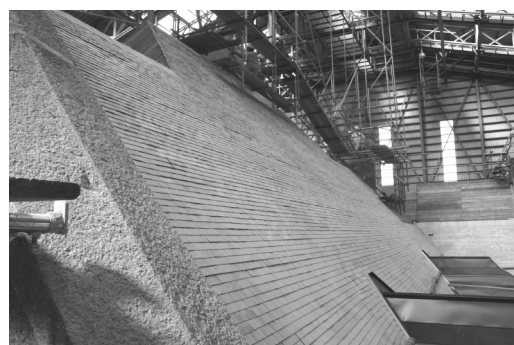
未来に残すメッセージ

—同志社クラーク記念館関係イベント—

同志社クラーク記念館保存修理工事で使用される瓦の下地の「土居葺板」(15cm×20cm)に未来に向けてのメッセージを残す企画が2006年11月から2007年2月にかけて同志社法人部により実施された。文化財を利用した「メッセージのタイムカプセル」で



(メッセージを認める校友)



(打ち付けられた土居葺板)

Roomなどで、メッセージを書く場所が設けられ、同志社諸大学・学校の多くの学生、教職員、そして卒業生がメッセージを残した。その数は約2,800枚で、これらは100年後の解体修理工事の時に、未来の同志社の人々へのメッセージとなる。

ある。ホームカミングデーや同志社EVE、Neesima

2. 資料提供(写真資料を中心に)

2006年

- 3月 1日 『京都で一週間』(ダイヤモンド社)に使用する「ハリス理化学館」写真1点の掲載を許可。
- 7日 月刊誌『ランティエ。』5月号(角川春樹事務所)中の「OBたちの懐かしの味」特集で利用する「同志社大学卒業アルバム」所収写真3点の撮影を許可。
- 4月21日 新書『女たちの会津戦争』(平凡社)に掲載する「新島襄・八重(新婚当時)」写真1点を平凡社一般書編集部へ貸出。
- 5月19日 月刊誌『歴史街道』7月号中の記事「総力特集・更生の会津武士道」に掲載する「山本覚馬」画像1点の転載をPHP研究所「歴史街道」編集部へ許可。
- 24日 『評伝 岡部長職一明治を生きた最後の藩主』巻頭口絵に掲載する「新島襄宛岡部長職書簡」画像の転載を慶應義塾大学出版会へ許可。
- 6月16日 月刊誌『SEVEN HILLS』(2006年8月号)の連載企画「プライベートスクール・デイズ」に掲載する「新島襄肖像画」写真1点を有限会社サザンカンパニーへ貸出。
- 7月 4日 株式会社毎日放送／MBSラジオ番組「ポッドキャスト1179・ポッドウォーク」制作のため、取材協力(新島旧邸にて)。
- 12日 「森鷗外と美術」展で展示する原田直次郎作『新島襄肖像』(1890年)を和歌山県立近代美術館、島根県立石見美術館、静岡県立美術館へ貸出。(12月22日まで)
- 8月 3日 番組「桑原征平のおもしろ京都検定」制作のため、株式会社オフィスサーティナインへ取材協力(新島旧邸にて)。
- 21日 毎日放送「美の京都遺産・新島旧邸」制作のため、株式会社放送映画製作所に取材協力。
- 9月 6日 カセットテープ「江崎玲於奈講演会(1975年12月2日)」を日本経済新聞社へ自伝参考資料として貸出。
- 14日 企画展示『歴史のなかの鉄砲伝来一種子島から戊辰戦争まで一』の図録に掲載する「カール・レーマン」写真1点の転載を国立歴史民俗博物館へ許可。
- 19日 特別展示「煉瓦のまち タイルのまち」展で展示する「西洋建築史ノート」(新島襄筆)、「同志社クラーク館設計図」、「同志社ジェームズ館設計図」計3点を大阪歴史博物館へ貸出。
- 27日 くららは館(仮称)開館準備にあたり、資料協力。
- 12月1日 『岩崎彌之助書翰集』に掲載する「新島襄宛岩崎彌之助書簡」2通の画像の転載を財団法人静嘉堂へ許可。
- キリスト教学校教育同盟機関紙『キリスト教学校教育』600号記念号に掲載する『キリスト教学校教育新聞』創刊号(1947年11月発行)をキリスト教学校教育同盟へ貸出。
- 株式会社ポプラ社『トイレの常識』に掲載する「新島旧邸腰掛式便器」写真1点の転載をグループ・コロンブス有限会社に許可。
- 26日 番組「高梁の夜明けと新島襄」制作のため、株式会社吉備ケーブルテレビへ取材協力。
- 27日 ガイドマップ「大磯まちあるきマップー駅周辺」に掲載する岡本一平画「新島襄先生」画像1点の転載を大磯ガイドボランティア協会へ許可。

2007年

- 2月 7日 日本風景街道・城下町あいづ道草街道「人物マップ」に掲載する「山本覚馬」「新島八重」写真の転載を城下町あいづ道草街道推進協議会へ許可。
- 3月 8日 「マイクロソフト エンカルタ 総合大百科」に掲載していた「新島襄」写真1点の掲載継続をマイクロソフト ディベロップメント株式会社に許可。
- 3月13日 『日本史有名人物辞典』(仮称)に掲載する「ワイルド・ローヴァー号」、「密出国時の新島襄」、「第一寮と第二寮」写真3点の転載を有限会社ハユマに許可。
- 3月19日 『三田ゆかりの50人』に使用する「新島襄」写真1点の掲載を市民グループ・文化財ボランティアさんに許可。
- 3月27日 『市民しんぶん上京区版』(2007年5月15日号)に使用する「新島旧邸外観」写真1枚の掲載を京都市上京区区民部総務課へ許可。

展示

2006年度は2回のNeesima Room企画展を実施し、Doshisha Spirit Week(キリスト教文化センター)、新島会館、ラーネッド記念図書館および同志社京田辺祭2006への展示協力を行った。

1. Neesima Room企画展

・春学期(第29回企画展)

2006年4月1日(土)～8月31日(木)

テーマ:「躍動する同志社—京田辺開校20年—」

来訪者数:延べ1,929名



・秋学期(第30回企画展)

2006年10月2日(月)～2007年2月28日(水)

テーマ:「戦後の同志社 1946～1986」

来訪者数:延べ2,747名



・特別展

2006年3月14日(火)～3月21日(火)

テーマ:アーモスト大学特別企画展「新島襄時代のアーモスト大学資料」

来訪者数:延べ154名

2. 展示協力

(1) Doshisha Spirit Week

・春学期 2006年6月12日(月)～17日(土)〈展示は春学期期間中〉

「新島襄と同志社」をテーマに24点のパネル展示を行った。展示内容は「寒梅館」「ラーネッド記念図書館」「同志社政法学校第1期卒業生」「同志社病院・京都看病婦学校」「学徒出陣記念植樹碑」「軍用機『同志社号』」「奉安殿」「ロックアウト時の同志社大学」など。

・秋学期 2006年11月6日(月)～11日(土)〈展示は秋学期期間中〉

「躍動する同志社—京田辺開校20年—」をテーマにDoshisha Spirit Weekで展示したパネルのうち22枚の展示を行った。展示の内容は「日の出を迎える京田辺キャンパス(2001年)」「臨光館」「諸君ヨ、一人一人ハ大切ナリ」「同志社小学校正門と校舎(明心館)」「同志社小学校チャペルコート」「快風館(学研都市キャンパス)」「同志社フレンド・ピース・ハウス(旧ハワイ寮)」「クリスマス・イルミネーション点灯式」「同志社創立130周年記念メモリアル・ウォーク」「同志社グリークラブのアメリカ演奏会(2004年)」「第二寮」など。

(2) 新島会館

「同志社とアーモスト」をテーマにDoshisha Spirit Weekで展示したパネルのうち20点の展示を行った。展示内容は「同志社アーモスト館」「アーモスト大学時代の新島襄」「A.ハーディー」「J.H.シーリー」「アーモスト大学 ジョンソン・チャペル」「友志園(アーモスト大学日本庭園)」「S.B.ニコルズ(第1回アーモスト大学学生代表)」「同志社アーモスト館献堂式」「O.ケーリ」「W.M.ヴォーリス」など。

(3) ラーネッド記念図書館

新入生向けの展示「新島襄と同志社」では年表1点、写真パネル12点、「私塾開業願」など資料7点、企画展示「ケーリ文庫紹介」ではケーリ家写真など3点、企画展示「京田辺、同志社と自由民権家」(2006年10月17日～2006年11月30日)では新島襄筆「祝言」(南山義塾開校式演説草稿)などの資料協力を行った。

(4) 同志社京田辺祭2006 (開催期間2006年11月4日～5日)

同志社京田辺祭2006開催時、同志社ローム記念館1階オープンスペースにて「写真で綴る京田辺キャンパスの20年」(2006年11月4日～10日)をテーマに写真パネル50点を展示した。展示内容は「同志社国際高等学校開校式」「同志社大学、同志社女子大学合同京田辺校地竣工式」「同志社大学田辺キャンパス航空写真(1986年)」「同志社女子大学航空写真(1986年)」「田辺キャンパス開校時の近鉄興戸駅前」「JR同志社駅前ホーム」「移転直後の工学部(理化学館)」「正門と同志社ローム記念館前の風景」「JR同志社駅前通学風景」「同志社女子大学京田辺キャンパス」「ホームカミングデー2003」「JR事故追悼記念礼拝」など。

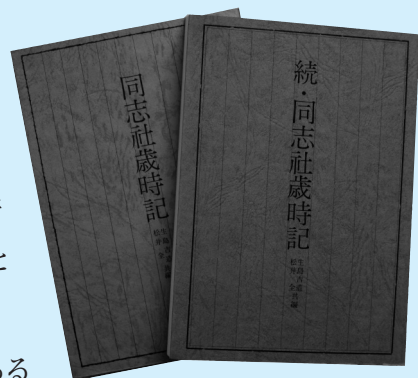


『同志社歳時記』所収画像の整理

『同志社歳時記』(正編)は、同志社創立百周年にあたる1975年に、また、「続編」は2年後の1977年に、生島吉造氏(元同志社香里中学校・高等学校校長)と松井全氏(元同志社職員)の共編により刊行されたものである。「本書は同志社紳士録でもWho's Whoでもない。無名、有名の同志社人の生きざまの記録である」と語られている(『同志社歳時記』余滴二、三、『同志社時報』第63号)ように、1年365日、それぞれの日にゆかりのある同志社のできごとや同志社に関係のある人などについて、日を追ったカレンダー式に配されたものである。

同誌に掲載された写真は同志社所蔵のもの以外にも、多くの方がたの協力があったことが、その「あとがき」に書かれている。

「わが母校、同志社」を愛する多数の方々の温かい支持がここに凝固して本書の刊行ができたものと思う。この本は過ぎ去った同志社の懐古に終わらないで、つぎの百年を力づよくふみ出す新鮮なエネルギーの一端となるよすがともなればと希うものである。



こうした同志社への篤い思いに満ちた『歳時記』であるが、同誌に関連する画像資料(ネガフィルム)については、以前に、編者の一人である松井全氏から当センター宛てに寄贈をいただいている。このほど、この資料に関する当面の整理作業を行った。

画像の総数はネガフィルム2,368コマに及ぶが、各画像をスキャニングしてデータとして保存した。そして、約70数本分に相当する銀塩フィルムの各コマについて、同誌の日付、件名、写真の出所などを手がかりにして各画像の特定をしていった。また、併せて画像のレイアウト印刷、資料内容の一覧表を作成し、データ検索の一助とした。同誌に掲載された写真のすべてがネガフィルムに収められているわけではないが、同志社に関連するものもあり、今後、同志社にかかわる貴重な資料として活用されることになるであろう。なお、同誌に掲載されている写真やその他関連する画像は、全体では相当数であるため、現段階で特定できていないものもあるが、今後補完作業をすすめていきたい。

同志社社史資料センター

公開講演会

Neesima Room企画展のテーマに添った講演会を2回実施した。

・春学期：「京田辺キャンパスの20年」

講師：堀川 宏（元同志社社史資料室長）

日時：2006年5月19日(金) 13:30～14:30

場所：ハリス理化学館1階会議室（同志社大学今出川キャンパス）



・秋学期：「戦後の同志社の一断面―田畑忍先生と岡本清一先生を中心に―」

講師：井ヶ田良治（同志社大学名誉教授）

日時：2006年10月13日(金) 15:00～16:00

場所：扶桑館1階106号教室（同志社大学今出川キャンパス）

・特別講演会：「アーモスト大学アーカイヴズ所蔵新島襄関係資料について」

講師：ダリア・ダリエンゾ（Daria D'Arienzo）

（アーモスト大学図書館歴史資料部門主任アーキビスト）

通訳：北垣 宗治（同志社大学名誉教授）

日時：2006年3月15日(水) 14:00～15:00

場所：ハリス理化学館2階Neesima Room（同志社大学今出川キャンパス）



研究活動

1. 機関誌

『同志社談叢』第27号 A5版234頁 2007年3月1日発行

論叢 何がアーモスト館建設を促進したのか

「吉野山」歌謡末記

新島襄と増野悦興

ミス・デントン来日の前後(3)

ミス・デントン着任直後の行動

資料紹介 新出・新島襄書簡6通の紹介

J.D.デイヴィスとN.G.クラークの往復書簡(4)

翻訳 「同志社の土着化(1875~1919)」(その7)

樋口 秀雄

吉海 直人

滝澤 民夫

日比 恵子

本井 康博

森永長壹郎

北垣 宗治

2. 第一部門研究(新島研究)研究会 (代表 大鉢 忠)

第67回例会 2006年4月17日(月)

・「新島襄の母とみの『口述』を改めて聴く

—安中藩家老尾崎直衛門父子と媒酌人岡田源七郎」

報告者：関口 徹

第68回例会 2006年5月8日(月)

・「新島襄の『脱国の理由』と『ロビンソン・クルーソー』」

報告者：森永 長壹郎

第69回例会 2006年6月12日(月)

・「徳田幸雄の新島回心論を中心にして」

報告者：明楽 誠

第70回例会 2006年8月5日(土)

・「新島襄の同志社大学設立運動—晩年の1888—89年」

報告者：太田 雅夫

司 会：竹山 幸男

・「D.W.ラーネッドと4つの同志社大学」

報告者：大越 哲仁

司 会：坂井 誠

・「新島研究の未開拓の分野、未解決な問題、不十分な部分及び今後の課題」

報告者：井上 勝也

報告者：北垣 宗治

司 会：本井 康博



第71回例会	2006年9月11日(月) 合評会 ・報告者：井上 勝也 本井康博著『新島襄を語る(一)―千里の志―』、同著 『新島襄を語る(二)―ひとりは大切―』について ・報告者：本井 康博 J.M.デイヴィス著・北垣宗治訳『宣教の勇者 デイヴィ スの生涯』について
第72回例会	2006年10月16日(月) ・「新島襄在学中のアーモスト大学―D' Arienzo女史の講演を通して―」 報告者：北垣 宗治
第73回例会	2006年11月13日(月) ・「札幌バンドと同志社の人々―北海道毎日新聞を手がかりに―」 報告者：小枝 弘和
第74回例会	2006年12月11日(月) ・「帰国後の新島襄―畢生の事業の実現に向けて彼の努力・忍耐・祈り・方策」 報告者：井上 勝也
第75回例会	2007年1月22日(月) ・「渋沢栄一における徳育言説の射程―日露戦争後の『論語』解釈を中心に―」 報告者：羽生 正人

3. 第一部門機関誌

『新島研究』第98号 A5版432頁 2007年2月28日発行

論叢	新島襄の数学ノート“Elements of Algebra”の原書 新島襄の母とみの「口述」を改めて聴く ―一家老尾崎直右衛門父子と媒酌人岡田源七郎― 新島襄と幕末維新の動乱 ―天誅組の烈士原田亀太郎との交友を中心に― 新島襄とオーティス・ケーリの学んだアーマスト・カレッジ ―歴代学長のプロフィール・伝統と当時のカリキュラム 新島襄の「脱国の理由」と『ロビンソン・クルーソー』 新島襄の回心(conversion)について 大学部としての同志社政法学校 ―新島襄逝去後の大学設立運動―	竹内力雄・小枝弘和 関口 徹 八木橋康広 井上 勝也 森永長壹郎 明楽 誠 大越 哲仁
エッセイ	アメリカのユーモア作家の「良心論」から見る 新島襄の苦闘―良心の自由を求めて	那須 頼雅
講演	アーモストの輝かしい息子―新島襄のアーモスト大学時代―	ダリア・ダリエンゾ (北垣 宗治訳)
コラム	名護屋丸について 数学ノートに描かれた新島の象のスケッチ	森永長壹郎 山田 果林

第164回 新島襄生誕記念会

日時：2007年2月13日(火) 17:00～19:30

場所：同志社新島会館大研修室

表彰

新島研究論文賞	松井 全(元同志社本部職員)
新島研究功績賞	ダリア・ダリエンゾ(アーモスト大学図書館歴史資料部門主任アーキビスト)
	杉井 六郎(同志社大学名誉教授)

記念講演

演題：多賀城碑の拓本と李樹廷の書

—「新島旧邸」の屏風—

講師：太田雅夫(元桃山学院短期大学学長)

新島襄生誕記念懸賞論文(2006年度)

入選者

【中学校の部】

最優秀賞	杉森 佳奈子(同志社女子中学校1年) 「新島襄の魅力」
優秀賞	中川 都萌(同志社女子中学校1年) 「好奇心」 池端 藍子(同志社中学校1年) 「NON SIBI」
佳作	篠原 由衣(同志社香里中学校3年) 「新島襄が私たちに残してくれたもの」 岩佐 千尋(同志社女子中学校1年) 「言霊の人、新島襄」 服部 愛子(同志社中学校1年) 「『寒梅』と『真理』」

【高等学校の部】

最優秀賞	飯田 智子(同志社国際高等学校3年) 「新島襄と八重との愛 —自分らしさとは—」
優秀賞	一柳 夏海(新島学園高等学校3年) 「女子教育の先駆者として」 津島 洋平(同志社国際高等学校3年) 「新島襄と大隈重信 —二人の交遊と建学の精神—」
佳作	西尾 茉以世(同志社高等学校1年) 「新島がめざした教育と現在の同志社」 高橋 順子(同志社香里高等学校1年) 「新島襄の学問への意識変化について」

【大学の部】

佳作	尾田 亜沙美(同志社大学経済学部3年次生) 「新島襄の精神を通して見るアイデンティティ」
----	-------------------------------------------------



新島襄と八重との愛 ―自分らしさとは―

飯田 智子(同志社国際高等学校3年)

私は、新島襄と新島八重の「愛」について調べた。なぜ、「愛」について調べようと思ったかというと、現代を生きる私たちにも、身近な事柄を調べることにより、同志社創立者新島襄から、生き生きとした人間らしさが分かるのではないかと考えたためである。また、以前調べたところ、お互いに相手を理解し合おうとしているような、言動があり、感銘を受けたためである。私たちはよく「誰か私に合う人は現れないかな。」や、気が合わない人がいると、ついつい「あの人がもう少し違っていたら。」などと、自分ではなく、相手に変化を求めてしまいがちである。しかし、彼らはお互い相手に求めるのではなく、誰でもない自分自身が、どのように変化したらいいのかを考えていたようだ。そんな二人から、人間関係や恋の在り方、考え方について学ぶことができると考えたためである。さらに、陰で新島襄を支えた、新島八重の生き方や考え方を同じ女性として気になったためである。当時の女性の在り方や女性像とどのように八重は異なっていたのかを知ることによって、「自分らしさ」とは何かを学べると考えたためである。

同志社大学創立者である新島襄は「書簡の人」として有名だ。彼の手紙が収められている『新島襄全集』に妻八重宛てのものが40通ある。この40通というのは、襄が手紙を出した数量順位(家族宛)では第3位である。ちなみに、第1位は公義宛で58通である。八重からも相当量の手紙を襄に送っていたと思われるが、残念ながらその書簡は一つも残っていない。

襄と八重との大きな共通点の一つとして、士族の出であることを挙げることができる。しかし、襄には実戦の体験がなく、八重には戊辰戦争で男装までして戦った勇姿があり、誇りをもっていた。その武士魂は、新島の死後も40年以上生きていかなければならなかった、八重にとって精神的に重要なものであったと思われる。しかし、襄との結婚生活においては、クリスチャンとして、八重が乗り越えていけないといけないものの、一つでもあった。襄の書簡の中にも、武士の心だけではなく、真の信者の心をもて、といったような内容が書かれていた。しかし、考えてみると、キリスト教とは、全ての人から見放されて、十字架にはりつけられて死んでいったイエスの死を崇めるものである。そして武士の心とは、士族の誉れの意識をも持つというものである。この二つは極端に異なる考え方ではないだろうか。八重は確かに、洗礼を受けたが、キリスト教信仰の根本は、すり込まれている武士の心から、十分に理解できていなかったかもしれない。新島はこの八重の弱さを理解しつつも、真のクリスチャンの心を身につけてほしいと考えていたようである。そのため、襄は八重の内にある、武士の心に気をつけて、旅先から八重の興味を引きそうな話を見つけては書き送っていた。このように、襄は八重に対して、真のクリスチャンになれ、とは強制していない。相手に気をつかい、さらに、このような考え方もある、と紹介する形で、自分の考えを伝えていたようだ。

ところで、襄はアメリカで周りの人に「当分結婚するつもりはない。」と言っていたそうだ。これ

からの人生は大変になるだろうと、結婚をあきらめていたのだろう。しかし、9年間のアメリカ生活を終え、日本に帰ってきた1年と1ヶ月の後に、八重と結婚した。襄にも、もとは江戸時代の武士らしく、男尊女卑の体質がしみついてはいたはずだが、アメリカの生活によって精神的に自立した強い女性を好きになったようだ。

妻となった八重は、キリスト教をさらに学んだ。これも相手を理解するために、まず自分が努力しなくてはいけない、という考えの現れだと思われる。そのとき、八重は襄がクリスチャンであるがゆえに4年間教師として勤務していた京都府立の女学校を辞めさせられた。しかし、八重は「いいのよ、これで福音の真理を学ぶ時間がもっととれるわ¹⁾」と言っていたそうだ。相手のことを理解できる、ということに喜びを感じていたようだ。

新島の夫婦像は当時の日本人の考え方とは異なり、それを自らの生活で実行しようとしていたようだ。彼が今まで見てきたと思われる夫婦はまずはもちろん、自分の両親である。武士の家であったため、男尊女卑の考え方はしみついてたと簡単に予想される。それからアメリカ滞在中にお世話になったハーディー家、シーリー家、フrint家である。これらの家族はニューイングランドのピューリタンのクリスチャン夫婦だった。彼らの考え方は、夫婦は人格として対等で、お互いに尊敬し合い、愛し合うというものである。新島が出国前に見て育ってきた徳川時代の伝統的な日本の夫婦像とは大きくかけはなれている。彼はアメリカの夫婦像の方に憧れをもったようで、父への手紙で、日本で結婚相手を見つけるのは不可能に近いと伝えている。そのため、このとき新島は結婚するならアメリカの女性、と考えていたのかもしれない。しかし、その後、山本覚馬と知り合い、八重と運命的に出会うことができ、結婚したのである。八重には離婚歴があった。八重の以前の結婚は政略結婚と言われる、お互いを愛して行われたものではなかった。これは、八重が再婚をしようと決意した理由の一つだと思われる。一方の襄は、そのような過去は一切気にしなかったようだ。新島襄の八重宛の手紙は残っているのに、八重から新島襄宛の手紙は残っていない、ということは、襄の過去にはこだわらない、という気持ちがあるのかもしれない。

1875年S・H・ハーディーへの手紙の中で、新島襄は婚約に関する記述をしている。襄は八重が洗礼をうけて、教会に迎え入れられるまで待とうと考えていた。しかし、彼女のキリスト教への思いが明白であるということ、を、確認していたので、洗礼を受ける前に婚約をしたそうだ。しかしこれは、キリスト教の考え方では、婚約はあくまで約束であり、約束を人間はやぶってしまうものである。離婚をするとキリスト教から破門をされてしまうため、婚約というバーチャル結婚をすることで、相手のことを知っていったのであろう。また、同じ手紙で八重は、兄である山本覚馬と似ている、と言っている。八重はあることをなすのが自分の務めだといったん確信すると、もう誰をも恐れないそうだ。彼女はキリスト教を信じるようになってから学校でもしばしば神の真理を語っていたことから、それがわかる。そんな性格を襄は男尊女卑ではない、対等な関係を築くことができると感じたのであろう。新島襄は八重のことを、「彼女は決して美人ではありません。しかし、私が彼女について知っているのは美しい行いをする人だということです。²⁾」と紹介している。また、彼は「私にはそれで十分です。³⁾」とも書いていた。襄は人を決して見た目で判断することなく、人の内面を見つめていたようだ。

1878年にハーディー夫妻に宛てた手紙の中でも襄のやさしさが伺える。新島が35歳のときである。夏休みに京都の郊外にある寺院を借りて、避暑をしたときのことがかかっている。そこへは料理人を連れていかなかった、とのことである。自宅ではお手伝いさんを何人が雇っているが、こんな所に一人でいる時にお手伝いさんを連れてくるのはよくない、とみなして一人で行ったそうだ。

新島襄は1886年に説教で『『キリスト教とは何か』と人から尋ねられたら、『愛をもってこれを貫く』と答えたい。⁴⁾』と言っている。また、「キリストは私たちを救うために自分の食べる物を問題にせず、自分の立っている所も人に譲られる。また人に逆らわず、すなおに捕縛されてゲッセマネの刑場に引かれ、裁く人の前でも沈黙して言い訳せず、荊棘の冠さえ受けて十字架につけられ、自分を罰する者を許せ、と祈って死なれた。キリストはこの愛をもってこの世に来られ、神の道を説かれ、私たちを救うために荊棘の冠を被せられ十字架に磔られた。また、この愛をもって私たちを近くに引き寄せ、今も私たちの心に働きかけられている。愛は忍び、許すものである。一見弱々しく無力に見えるが、天下の誰が愛に敵対できようか。犬や猫でさえも人間の愛に動かされるのではないか。⁵⁾』と説いた。新島襄はこの大きな愛を夫婦の間でも実践しようと努めていたのではないだろうか。

彼らの結婚生活はおよそ14年という短い期間で、新島襄の死によって終わってしまう。しかし、その共に歩んだ期間、襄と八重はお互いに、相手のことを理解しようと努力し、実際に行動に移していた。また、襄の理想とする、夫婦が対等につき合う、という夫婦像は、当時の日本の社会ではとても奇抜なものであったに違いない。実際、家庭で、「八重さん」「襄」と呼び合い、襄が家事を手伝い、人力車を八重と同乗する姿は、当時の学生たちにとって、非常に奇怪なことだったようだ。

まわりの人や環境にとらわれず、自分達の信念にそって生きた新島夫妻。そこには大きな愛があり、彼らの豊かな人生もあった。自分らしく生きるとは、自分の考えを変えないことではない。他の人の考えを理解した上で、自分の考えをもち、それを貫くことだと私は考える。自分らしく生きる過程の中に、人を愛する、理解するということが含まれているのではないか。

〔注〕

- 1) 『現代語で読む新島襄』 129ページ
- 2) 同前 129ページ
- 3) 同前 129ページ
- 4) 同前 197ページ
- 5) 同前 198ページ
- 6) 同前 191ページ

〔参考文献〕

現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』 丸善 2000年
伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』 晃洋書房 2002年
同志社女子中学校 新島襄誕生記念礼拝説教
(http://homepage2.nifty.com/room30th/sermon/change_because_of_love.html, 2006/10/02/9:30)
同志社大学新島遺品庫資料のデジタル公開【部分公開】
(<http://joseph.doshisha.ac.jp/ihinko/bubun2/story/index2.html>, 2006/10/21/12:00)

新島襄の魅力

杉森 佳奈子(同志社女子中学校1年)

「神の愛」という、かつての日本に無かった教えを広めた新島の活動は、当時の人々にどれだけ新しいことを与えただろうか。主イエス・キリストの御手に守られていると説かれても、納得のいかない人が多かったのではないか。では、その彼らにどうして理解させたのか。新島が書いた手紙の数々に、自身の持つ優しさ・純粋さを見つけることは出来ないか。その人柄が、人びとの心をひきつけたのではないかと考えた。

父親への手紙の中に「虎屋の饅頭も食いかね甚だ残り惜しく思われ候。敦盛蕎麦を試し候、至極宜しく、六杯程も喰籠み」¹⁾と書いてある。

日頃の様子を知らせるのに、老人にとって一番分かりやすい話題にしている。また、家族の平和を、昇る太陽に祈る等は、自然に感謝する農耕民族である日本人の気持ちが表れていると思う。温泉に入って心地いいという気持ちも、よく分かる表現だと思う。また、「重き病人は院中に入れ、夜具、襦袢、股引き、枕、パン、牛鶏肉杯々までもくれ」²⁾も、病院の意味を説明するのに病院食を例に挙げている。その時代の街の様子を、農作物を例に挙げて日本の街と比べて知らせている。外国のことなど想像もつかない人に伝えるのには、良い方法だろう。どの話しも、どれだけ理解してもらえるかを考えている。とにかく、父親達を安心させたいと願う優しさがある。

ところが、弟には強い兄が出ている。食事のことから嗜好品まで細かい指示が出ている。父母のことには「ときどき閑を偷み父母を神社仏閣に引き連れ」³⁾とあり、弟自身には「酒を一切のまぬよう。あまり烟草も吞まぬよう」⁴⁾と書いている。若い時に脱国したので弟との関係は薄かったようである。手紙の内容はうっとうしがられたのではないか。しかし、精一杯弟を思いたかった優しさを感じられる。こうあってほしいという希望は、弟だけではなく青年達全員へのメッセージともいえる。

では、その生徒達へはどうだったのか。徳富猪一郎、河辺鎬太郎らに「小生においては些少も君等と隔絶する心はこれなく候。君ら少しく察し賜え」⁵⁾と書き、自分の元を去って行く人達のことでも、その先にあることを心配している。去る者は追わないが、新島の真の考えを理解する人は再び迎え入れる。この愛があるから、教え子達は、成長して新島の元に戻って来たはずだ。新島が期待したのはこの成長だった。大久保真二郎宛の手紙は、最もそれが表れている。真のつながりを持てたのはすばらしい。だから、病気でありながら動き回っている。元気な人の何倍も行動することで、人に信頼される。

アメリカで世話になり、「アメリカの母」とも思うハーディ夫人宛の手紙の中では、最大の恩人であるハーディ氏が死去したことに対する新島の気持ちが書かれている。礼儀正しい、真面目な青年のイメージが相手にはあるだろう。年をとっても新島は純粋なのだ。過去のつながりが深かったから、アメリカからの助けがいつまでもあった。新島のすばらしさを皆が知っていた。

ただ、妻へはどうだろう。当時の男尊女卑の考え方の中で、妻に気を使っていたので、その優しさは最高だったと思う。戊辰戦争に従軍した程の「女丈夫」⁶⁾なのだから、妻というより同志だったと思う。前橋から妻宛に出した手紙の中に、新島の気持ちが色々書かれている。「風の吹き込み候ところに私をすえおき」⁷⁾と、体調不良になった不満を書いたのだと思う。

それぞれへの優しさは、相手によってその表現の仕方を変えた。しかし、その真面目さと愛が、人々の心を動かし伝道へとつながった。「彼が言うのだから」という思いで人々は新たな道への一歩を踏み出し、やりとげることが出来た。

優しさがあるから愛があり、許しがある。それが大きくなり、「神の愛」になることを新島は伝えたかった。

〔引用文献〕

- 1) 同志社編『新島襄の手紙』p.22、岩波書店、2005年
- 2) 同前 p.25
- 3) 同前 p.34
- 4) 同前 p.60
- 5) 同前 p.161
- 6) 本井康博『新島襄の交遊』p.147、思文閣出版、2005年
- 7) 前掲『新島襄の手紙』p.308



新島旧邸

ボストンの友人J. M. シアーズの寄付によって建てられた新島襄の私邸で和洋折衷の木造二階建て日本人住宅として、また、同志社創立者の旧居として価値が高く、1985年に家具・調度類を含めて京都市有形文化財に指定された。

■公開日

3月～7月、9月～11月の毎週水・土・日曜日(ただし祝日、休日は除く)

春と秋の京都御所公開期間中、毎日

11月29日(創立記念日)

■公開時間

10:00～16:00

<2006年度見学者数>

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	3月	合計
1,271人	415人	595人	425人	463人	669人	1,537人	517人	5,892人

委員会

同志社社史資料センター委員会委員

伊藤 彌彦 同志社社史資料センター所長
 田端 信廣 教務部長
 森田 雅憲 企画部長
 風間 規男 人文科学研究所長
 工藤 和男 歴史資料館長
 植田 弘 法人事務部長
 中山 健二 総務部長
 小崎 眞 女子大学

菊地 登 高等学校
 西山 啓一 香里中学校・高等学校
 太田 信幸 女子中学校・高等学校
 敦賀 昭夫 国際中学校・高等学校
 竹山 幸男 中学校
 本井 康博 神学部
 出原 政雄 法学部
 田中 真人 人文科学研究所

同志社社史資料センター運営委員会委員

伊藤 彌彦 同志社社史資料センター所長
 風間 規男 人文科学研究所長
 植田 弘 法人事務部長
 小崎 眞 女子大学
 太田 信幸 女子中学校・高等学校

竹山 幸男 中学校
 本井 康博 神学部
 出原 政雄 法学部
 田中 真人 人文科学研究所

事務室 所長 伊藤 彌彦
 事務長 九鬼 弘一
 担当課長 馬淵 吉倫
 社史資料調査員 小枝 弘和
 社史資料調査員 栗原 真美

同志社社史資料センター規程

2004年4月24日制定
2004年5月 1日施行

(設置)

第1条 本学同志社社史資料センター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、創立者新島襄並びに同志社関連資料の収集、整理、保存及び公開業務を継続、発展させ、同志社創立以来の歴史と伝統を後世に継承していくとともに同志社教育の充実と発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- (1) 同志社社史資料の研究、収集、整理、保存及び公開に関すること。
- (2) 新島研究に関すること。
- (3) 同志社社史編纂に関すること。
- (4) 『同志社談叢』の発行に関すること。
- (5) Neesima Room の管理運営に関すること。
- (6) ハリス理化学学校記念展示室の管理運営に関すること。
- (7) 新島遺品庫の管理運営に関すること。
- (8) 新島襄旧邸の管理運営に関すること。
- (9) 新島襄及び同志社建学の精神についての啓蒙活動に関すること。
- (10) その他センター設置の目的に照らして必要と認められる事業

(所長)

第4条 センターに所長を置く。

- 2 所長は、学長が任命し、センターの業務を統括する。
- 3 所長の任期は1年とし、再任を妨げない。

(同志社社史資料センター委員会)

第5条 センターに同志社社史資料センター委員会(以下「センター委員会」という。)を置き、以下の事項について審議する。

- (1) センターの事業に関すること。
- (2) 社史資料調査員の候補者推薦に関すること。
- (3) その他必要な事項

(センター委員会の構成)

第6条 センター委員会は、次の者をもって構成し、委員は学長が委嘱する。

- (1) 所長
 - (2) 教務部長、企画部長、総務部長、人文科学研究所長、歴史資料館長及び法人事務部長
 - (3) 女子大学、高等学校、香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校、中学校から各1名
 - (4) 学識経験者若干名
- 2 第1項第3号に掲げる委員は、各学校長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 3 第1項第4号に掲げる委員は、所長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

- 4 センター委員会は、所長が招集し、議長となる。
- 5 センター委員会は、委員の過半数をもって成立し、議事は出席者の2分の1以上の賛成をもって決する。ただし、第5条第2号に係わる議決は出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

(運営委員会)

- 第7条 センター委員会に同志社社史資料センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。
- 2 運営委員会は、第3条に掲げる事項について計画立案し、センター委員会の議を経てその実施にあたる。

(運営委員会の構成)

- 第8条 運営委員会は、次の者で構成する。
- (1) 所長
 - (2) 第6条に掲げる者のうち所長が任命する者若干名
 - (3) 所長が必要と認めた者若干名
- 2 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。
 - 3 委員会は、所長が招集し、議長となる。

(事務室)

- 第9条 センターに事務室を置く。
- 2 事務室に職員若干名を置き、センターの事業、委員会に関わる事務、その他必要な事務を行う。
 - 3 センターの事務組織は、同志社大学事務機構規程に定めるところによる。

(社史資料調査員)

- 第10条 事務室に社史資料調査員たる職員若干名を置く。
- 2 社史資料調査員は、社史資料の収集、整理、調査、企画、展示等の業務を行う。
 - 3 社史資料調査員の選考に関する事項は、別に定める。

(事務の所管)

- 第11条 この規程に関する事務は、同志社社史資料センター事務室が行う。

(改廃)

- 第12条 この規程の改廃は、センター委員会の議を経て大学評議会で行う。

附 則

この規程は、2004年5月1日から施行する。

同志社大学
同志社社史資料センター報 第3号

発行日 2007年4月28日

編集・発行 同志社大学 同志社社史資料センター

〒602-8580京都市上京区今出川通烏丸東入

Tel. 075-251-3042 Fax. 075-251-3055

<http://joseph.doshisha.ac.jp>

表紙イラスト：新島襄が留学時代に神学ノートに
描いたスケッチと測量術の図